

---

# The Perfect Score

manyon

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The Perfect Score

### 【NZコード】

NZ696F

### 【作者名】

manyon

### 【あらすじ】

「く普通の大学生・ハルは、この春から一年間だけ、高校生に戻る。親友の夏希と交わした“あの約束”を果たすため、トランペットを片手に彼女は吹奏楽部に入部したが…！？70人の吹奏楽部に、たつたひとり20歳が潜入！－夢と絶望、友情に恋、切なさを詰め込んだ、ある少女と吹奏楽部員の、四季をひとめぐりする物語。

## #01 少女のための序曲

人と騒音で溢れ返つたこの街でも、耳を澄ませば桜の花が咲き誇つていることに気付く。

しかし、高層ビルが立ち並んだこの都会で、屋内から桜を眺めることは非日常的なことだつた。

せつかく嬉しい春が訪れたというのに、そんなことは目もくれず、ひたすら仕事に励む人間がこの街には多かつた。

この部屋にいる人間も、またそれに当て嵌まる。

「…では、我が社への入社を決心して下さったのですね、周防さん」

谷口という女性は、背筋をピンと伸ばしたまま、口元を左右対称に上げては微笑んだ。

灰色に白のストライプ、腹部に装飾の施された金ボタンが光るスーツを着ても、それに負けないくらい華やかな笑顔を絶やさず、ハキハキと話す女性だつた。

その隣には、パンダのような、愛嬌はあるが少々メタボリック症候群かと思われる中年男性が、常時緩んだ姿勢で腰掛けていた。

その首に掛けられた社員証には、「人事部長」という彼のポジションがはつきりと書かれていた。

「…」そのままの谷口に向かつて、「御社から内々定をいただ

くことができて、大変光栄です。これからどうぞよろしくお願ひ致します」と清々しく答えたのは、周防 春という二十歳の女子大生だった。

就職活動のために黒く染め直した髪が、少しばかり肩にかかるて髪  
陶しく思えた。

就職活動が終わったらすぐこじでも染めようと考えていたのだが、これからのことを考えると、やはり黒髪のままでしかいられないのが現状だ。

しかしそんな些細な不満以上に、ハルの心は歓喜で満ち溢れていた。

三月の後半に誕生日を迎える彼女は、二十歳のうちに意中の企業から内々定をもらえて本当に嬉しかったのだろう、四六時中その表情には一時の曇りもなかった。

「ありがとうございます。周防さんと一緒に働くことを楽しみにしています」

おそらく何十人にも同じ台詞を言つたと思われるが、言いながら口元を上げ田を細める谷口のその笑顔は、相変わらず一級品だった。

そしてそのまま横を向き、上司の顔を覗き込んだ。

「梅田部長、なにかありますか?」

右手でアゴをさすっていた人事部長の梅田は、真顔のまま数秒考えてから話し始めた。

「やうだそうだ、周防さん。本当に残りの学生生活をねえ、ほれ、最終面接で私に話してくれたね、あの計画通りに過ごすんですか？」

梅田は、少年のように瞳を輝かせ、腹部の贅肉が多少の邪魔をしながらも、前のめりになつて尋ねた。

「…御社にじ迷惑はかけません。細心の注意を払つて行つてきますので」

「むしろ素晴らしい経験になると思いますよ、ええ。内々定者の中にも、そんなことしようつて人はなかなかねえ…。入社式では、ぜひ体験談を聞かせて下さいね、周防さん」

梅田の笑顔に、ハルはほつとした。

一瞬和んだその場の空気に飲み込まれたのか、冷静沈着な女性である谷口まで、こんなことを言い出した。

「大人ぶることは簡単にできますが、過ぎ去つたことをもう一度演じてみようと思つても、なかなかできることではありません。歳もとつていますしね。だからこそ周防さんのチャレンジは、その…抽象的な表現になつてしまいますが、素敵だと思います。私も応援しますよ」

ただのお姉さん、の表情を見せてくれた谷口と、自分より何年も生きていて経験も豊富なのに、こんな未熟者のやうとしていることを素直に応援してくれる梅田を見て、自分は本当に素敵な会社への入社チケットを獲得することができたと、ハルはしんみりした。

それと同時に沸き上るのは、なんとしてでも成功させてみるとい

う、これまでに自分でも感じなかつたほど の強い意欲だつた。

リクルートスーツ姿もやつと板に付いてきた頃、就職活動は他の学生より早めに終えることができたが、周防 春にはまだやらなければならぬことがあつた。

大学生活最後の一年を犠牲にしても、必ずやり遂げるんだ、彼女はひとすじの覚悟を胸に立ち上がつた。

「…ちやんと叶えてくるよ、夏希

帰り道で見上げた桜、その後ろに広がる春の青空に向かつて、ハルはそつと呟いた。それに答えるかのように、ひらり、と桜の花びらが舞い落ちた。

## The Perfect Score

### #01 少女のための序曲

人と騒音とネオンの灯りが絶えることのない街から五駅ほど、栄えているわけでもないが、決して田舎でもない場所に、帝都高校はある。

左右対称に生い茂る桜並木道を進むと、古めかしいがどこか威厳のある雰囲気の漂う銅板が、まず歓迎してくれる。

「帝都高等学校」の上に、それよりほんの少しこんな文字で「帝都大学付属」という文字が刻まれたその銅板を通り過ぎる度に、「将来は帝都大学の学生になれるなんて、努力して受験に合格した甲斐がある」と誇る者もいれば、「所詮はここで温室育ちになつて、学力も衰えるんだろうな」と憂いをこぼす者もいた。

この高校は、大学受験がない分生徒が部活動に励むことで有名で、毎年たくさんの部が、県大会やインターハイで輝かしい成績を収めていた。

そんな帝都高校の、それは桜の花も咲き誇ることに飽きた四月の十五日、新学期早々から窓際の席を陣取っている大和響平が気持ちよさそうに居眠りする三年五組には、一人だけ新しくクラスメイトが増えた。

「今日はみなさんお待ちかねの転校生を紹介します。…さあ、早速紹介するので、申し訳ありませんが和泉さん、大和くんを起こしてもらえますかね？」

このクラスの担任を務める、来年で定年退職となる美作は、かすれた声を精一杯張り上げて、転校生をクラスへと呼び入れた。

美作の三日月の形をした目が、さらに細くなつた。

美作は滅多に怒ることもなく、生徒から「みまちゃん」という愛称で親しまれている、音楽の教師だった。

少しばかり曲った腰が、その身長を低く見せているが、それでも大概の生徒を見下げるほどの背丈だった。

「ここここ」しながら、灰色の髪をもぞもぞと触ることが彼の癖らしい。そしてその癖が出る時は一段と機嫌が良い、とこりこりとは、言わざと知れた生徒の間での豆知識だった。

美作が、笑顔で灰色の髪をもぞもぞと触っている間にも、呼ばれた転校生は堂々とした歩みで黒板の前に登場した。

「みなさん、はじめまして。父の仕事の都合で、年内はこちらの高校でお世話になることになりました。周防 春です、よろしく」

微笑みながら挨拶をしたその女子生徒を見た瞬間、窓際に座っていた習志野 彰は、即座に体ごと後ろに振り返り、響平の頭にバシッと平手打ちをかました。

「起きろ響平…」

その声と共に、響平の目はぱちりと開き、ゆっくりと重たい頭を起こした。少し長めの茶色がかつた前髪、切れ長の目で整った顔立ち、毎日のように見ている彰の顔がそこにあつた。

「…なに?」

響平は右手で頬を支え、いかにも寝起きの顔のまま、彰に尋ねた。

響平は、ちょうど良い長さに整えられた、学生らしさすっきりとした黒髪を、わりと格好良くワックスでスタイリングして来る…のだと

が、授業が始まるまでは常に仮眠をしているため、残念ながら毎日のように髪型が崩れている。

今日は無造作にうねらせたサイドの髪が、わずかに左寄りになってしまっていた。

第一ボタンまで開けられた制服のシャツに気付いた彰が、「また開いてんぞ、変な色気出すんじゃないよ」と呆れた。

「あ、またか」と、明らかにその事態に興味を示さず、手元だけに頼つてボタンを閉める響平に、彰は一方的に話し始めた。

「遂に次の彼女候補に出会えたな」「いやあ一年上好きが覚醒して早一年…三年生になつてからは年上もおらず、かといって女子大生とコンパできるような勇気も金もなく、ここは同学年にするかと妥協したが、やっぱり好みの女子は見付からず…だつた不運な俺。でも見ろよ、あの転校生！」

にやりと言い放つた彰の視線の先にいる転校生に、響平も目を向けた。

その外見に関して、響平は至つて好印象となるような意見を持たなかつたが、「活発でもなさそうだし色も白め、似合つのは…クラリネットあたり」とだけ感じた。そしてまた腕を組み直し、頭を下に向け、寝る態勢に入る。

「なんか大人っぽいと書つかせ、落ち着いてねえ？化粧も綺麗だし髪もサラッサラ！」

喋り続ける彰をよそに、再び夢の世界へと旅立つた響平を見て、そ

の隣に座っている和泉 マリは、クスクスと笑った。

「なに笑ってんだよマリ！」と彰が小声で言つた瞬間、美作は「じゃあ少々騒がしいけれど、周防さん、あなたの席はあの習志野くんの隣になります。後ろの和泉さんはしつかり者だから、わからないことがあれば習志野くんより和泉さんに尋ねるとよろしいですよ」と、ハルを黒板の前から見送つた。

ハルは彰の顔をチラツと見た。そして彼女はあることを確信した。が、無表情のまま歩き続け、席に到着すると、笑顔を作つた。

就職活動を経た彼女は、「表情を意図的に作る」という、今までの自分にはなかつた術を習得していた。

そして一言、軽く頭を下げた。「ようしひ、習志野くんと和泉さん」

ハルの愛想の良い挨拶に気分を良くした彰は、思わず声を大にして「マリもしつかり者だけど、授業や学校のことはなんでも俺に聞いてくれいいからね、ハルちゃん！」と身を乗り出した。

その姿を見て、ハルは若干驚きながらも、思わず苦笑いしながら呟いた。「ほんと、兄弟で正反対なんだ…」

まったく聞き取れなかつた彰は、「え？ なに？」と聞き返したが、「なんでもないよ」と即答したハルの無敵の笑顔に、その会話は終止符を打たれたのだった。

クラスの全生徒がハルに視線を注ぐ中、一時間目の授業は幕を開けた。ただ一人、彼女の後ろで居眠りを続行している、響平だけを除いて。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7696f/>

---

The Perfect Score

2010年10月15日22時27分発行